

湘南慶育病院

症例概要 患者：70代 男性

病名：左側頭頭頂葉脳内血腫

入院期間：2021年5月～2021年9月

経過：2021年5月に発症し救急搬送。16病日後に当院回復期リハビリテーション病棟に転院。中等度の意識障害、重度左片麻痺、失語症、嚥下障害を呈していた。ADLは全介助、食事は経管栄養、排泄は膀胱留置カテーテル、オムツ全介助であった。ご家族の希望としてトイレ動作や食事の自立が挙げられた。退院時は失語症は残存したものの介入により機能改善を認め、ADLは全て自立となった。前職の大工には復職は出来なかったが、簡単なDIYを行える状態となった。

内 容

【症例紹介】

病前は大黒柱として大工を生業とし、奥様とともに経済面を支えていた。入院時、中等度の意識障害と重度左片麻痺を呈し、失語症の影響により発話・指示理解が困難であった。経管チューブ、膀胱留置カテーテル、オムツ着用であり、ADLは全介助レベルであった。ご家族は食事とトレイ動作が自立し自宅退院を希望されていた。

【症例の変化】

PTによる装具を使用した積極的な立位・歩行訓練により徐々に意識障害の改善がみられ、1週間後にはムラはあるものの覚醒している時間が延長したため、膀胱留置カテーテルが抜去された。それに伴い排泄欲求を訴えることが増え、リハビリでトイレ誘導を開始した。3週間後には覚醒状態良好となり経管チューブが抜去され、OTによる食動作練習が開始され、STによる経口摂取獲得のための摂食訓練、コミュニケーション獲得のための言語訓練が開始された。

4週目には病棟スタッフによる腋窩介助での移動、嚥下食での摂食が開始となった。言語面では指示を理解する回数が増えてきた。7週間後には杖なし歩行遠位見守りでの移動、軟菜食の摂取が開始となった。この時期にはコミュニケーションが成立する回数が増えていた。

最終的には食事は3食常食で摂取可能となった。さらに、手すりを使用せずに階段昇降、不整地を含めた屋外歩行を連続30分以上可能となり、大工動作は獲得できたが、視野障害と失語症の影響により仕事復帰は困難であった。

退院前に記念として病院菜園の看板を作成できた。作成している時はいきいきとしており、道具について説明も行い、奥様の手伝いとなる家事が可能となり退院することとなった。